平野謙

文壇時評

(上)

文壇時評（上）© 1973
定価 一八〇〇円
昭和四十八年四月二十五日初版印刷
昭和四十八年四月三十日初版発行
著者 平野謙
発行者 中島隆之
印刷者 草刈龍平
発行所 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
振替 東京一〇八〇二番
落丁・乱丁本はお取りかえします
1095-037308-0961

目次

文壇時評……5
同人雑誌評……191
新聞小説時評……237
推理小説時評……261
文壇クローズアップ……333
起点……417
続文壇クローズアップ……469
一頁時評……511
選評……531
あとがき……611

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文壇時評

（上）

文壇時評

昭和二十一年八月

去年の八月十五日、私は北九州の炭坑にいた。ちょうどお盆の休日で寮にくすぶっていた私は「玉音放送」のことを知らなんだ。無条件降伏という思いもかけぬかたちで戦争の終ったことを知ったのは午後二時すぎだった。まもなく配達された新聞の号外に眺め入り、私はひとりで涙をのんだ。夕方、同室の青年とビールを飲み、すこし酔っぱらったその青年が鉄カブトをたたき割ろうとして苦心惨澹するさまを私は黙って眺めていた。それからはや一カ年、まるで夢のようである。

この一年間の文学界の動きを概観するのが私に与えられた課題だが、去年の八月十五日がまだ昨日のことのようでもあり、とおいむかしのことのようにも思えて、一年という歳月の時間的観念さえさだかならぬ私にとって、手際のいい概観なぞできようはずもない。また、文壇自体も手ごろな概観に耐え得るまでにたちなおっていない。

無論、いろんな現象は起伏した。まず大家の復活、永井荷風、正宗白鳥、志賀直哉らの名が最初にクローズ・アップされた。また、鎌倉文庫が衆人環視のうちに雑誌《人間》をこの一月に創刊した。つづいて民主主義文学の創造と普及をめざす新日本文学会が結成された。雑誌《新潮》もその編集陣を更新した。おどろくほど多くの雑誌があいついで創刊された。その間、丹羽文雄、石坂洋次郎らがまず報道班員の暴露小説を書き、舟橋聖一、織田作之助らがここぞとばかりに書きまくった。島木健作、武田麟太郎、葉山嘉樹、杉山英樹ら、ひろい意味で左翼文学出身の人たちが中道に斃れた。新しい作家の名前も二、三あらわれた。だが、それら雑多な現象をつらぬく徴表は、すぐる十年間の戦争をくぐりぬけてきた明瞭な痕跡を担っていないという奇怪な事実だろう。

『踊子』の作者が古稀の齢を目前に控えて、空襲のさなかも制作の筆を絶たなかったのはおどろくべきことだ。しかし、『踊子』は名作『濹東綺譚』になにものをつけくわえ、『灰色の月』は『十一月三日午後の事』からどれだけ発展しているか。宇野浩二、川端康成、横光利一らの新作も戦争中の作品と本質的な差異を示していない。丹羽、舟橋らにいたっては、戦争中の体験をただ風俗的に裏返したにすぎない。

私どもは戦争中いのちを賭けて生きてきたものだ。かけがえのないその苦悩、その不安をすべて誤謬として戯画化

することができようか。戦争のなまなましい烙印はまだ身うちにうずき、それの文学的意味づけを求めてやまない。無論、そのような試みもあらわれていないではない。石川淳の『無尽燈』（文藝春秋七月号）、坂口安吾の『白痴』（新潮六月号）などは戦争の痕跡をそれなりに文学的に定着させている。彼らが戦争中刻苦して『森鷗外』を書き、『日本文化私観』を綴っていたからこそ、戦争の文学的意味づけはここによみがえり得たのである。

しかし、私どもの傷痕は単に戦争によるものではない。マルクス主義文学運動の崩壊という歴史的事実、これから巣立とうとした決定的な時期に蒙ったその挫折感、それにオーヴァラップして今次戦争が接続するのだ。そこに私どもの傷痕のいわばかけがえのない二重性がある。そのような特殊な痕跡は『白痴』的方向にのみ収斂され得ない。同時に、現在までの新日本文学会の活動もそのような私どもを十全に包摂しない。それは中野重治の力説にもかかわらず、旧ナルプの復活という色彩からのがれきっていない。私どもが《近代文学》という渺たる雑誌を一月に発刊した意味がそこにある。

〈原題・傷痕の二重性〉

昭和二十二年一月

新しい年を迎えるたびに、今年こそと虚しく念願する気持を、すでにいくそたびくりかえしたことか。性懲りもない自分にようやく愛想つかしをおぼえる年齢に私も達した。それに一九四七年という年も決して希望の年ではあるまい。敗戦という現実相がいかに深刻な事実だかを、国民のひとりひとりの日暮しにまで否応なく訓える年にちがいない。もともと受け身の私は、今年はいっそう受け身に暮すことになるだろう。どれだけ受け身で耐えられるか。もしそこに受け身のつよさというようなものが生れてくれれば、満足とせねばなるまい。流されつつ流されっぱなしにならぬ抵抗力。

現在の私は文藝時評家のはしくれというところだろう。ほかならぬ文学の領域を生涯の仕事にえらびながら、一介の時評家をもって自認するのはなさけない、とする気持が以前からあった。いまもある。むかし青野季吉を平批評家と呼んだことも忘れはせぬ。だが、私は今後も文藝時評家として生きてゆくだろう。所詮、現代文学の生態にかかわる以外、やはり自己救済の道はなさそうだから。高のぞみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はすまい。ただ時評の枠をもっと気ままに伸びちぢみさせてみたい。文藝時評という既成の枠を私なりに破壊してみたい。

できれば芥川龍之介について書いてみたい。この主題はすでに手垢にまみれている。新解釈なぞ出せる余地はなさそうである。最近では《近代文学》に連載された福田恆存の論文がいかにも出色の出来ばえだった。しかし、私は私なりの肖像を描いておきたい。それは私自身の文学的出発を顧みることでもあろうから。

二葉亭の『浮雲』で近代日本文学が開幕したとすれば、自然主義文学運動はその一応の実りであり、明治文学はここに完了する。大正文学は反自然主義的傾向にはじまり、芥川龍之介の自殺をもって一応終結する。この明治大正文学の見取り図を背景に、芥川龍之介の肖像を描きだしてみたい。近代日本文学史上、自然主義文学運動とプロレタリア文学運動とは今日私どもが再検討するにたる画期のムーブメントだった。その意味づけを芥川龍之介に焦点を定めつつ、自分に納得のゆくまで追尋してみたい。

もう少しくわしくいえば、大正文学は反自然主義的傾向を最初のページにもったが、その反抗はいわば自然主義文学という土台に乗っかったそれにすぎない。頽唐派、理想派、理知派なぞ、反抗の声はいろいろだったが、それらのエコールは畢竟、私小説・心境小説という独自の詩形に溶解し、爛熟していった。自然主義から私小説へという展開が近代日本文学史のジェネラル・ラインと化した所以である。

しかし、自然主義に真実反抗した文学志向はなかったか。たしかにそれはあった。鷗外、漱石の文学がそれだ。鷗外の諦念、漱石のエゴ、それはそれ自体で素朴実在論的な自然主義を超克している。わけて鷗外の場合、そのレジグナチオンは実人生密着の自然主義的人間観をはるかに高踏していた、といっていい。実人生と文学との相関において、自然主義と漱鷗文学とは相対峙するふたつの潮流だった。芥川龍之介はこの二潮流を一身に受けとめ、それの統合を希求したが、ついにその脆弱な肉体は実人生と文学という二元的矛盾を止揚し得なかった。鷗外直系の弟子たらんとして、なお志賀直哉の強烈な肉感に無限の羨望をおぼえながら、敗れさった作家である。その「文学の敗北」をそのような文学史的背景のうちに組み入れてみたい。

プロレタリア文学運動はかかる芥川龍之介を「敗北の文学」と規定することによって、その社会階級的視点から明治大正文学の遺産をまず否定するところに出発した。それ

までの文学諸流派とは全く面貌を異にした社会科学的な地点に立ち、閉鎖的な文壇の垣を破砕しつくそうとした。これが昭和文学の冒頭を飾る歴史である。しかし、内的外的の諸矛盾によって、一九三四年にそういう画期の運動は一応挫折せざるを得なかった。芥川龍之介の自殺はそのようなパースペクティーフにまで架橋する。現実と文学との相関という視点から、芥川龍之介という犠牲者の生涯を描いてみること、それが私のテーマの素描である。

しかし、実際にとっかかってみれば、どんなぐあいに仕上るか、予測はつけがたい。ただ私はそれを、文学史家の立場からではなく、どこまでも一文藝時評家の資格においてなしとげたいと希うものである。

ささやかな一時評家として生きぬくこと。一茎の考える葦として激動する現代日本文学の渦中に生きつづけること。その冀求のもとに、近代日本文学の歴史に踏み入りたいのである。

〈原題・一時評家の弁〉

昭和二十二年三月

政治は果して文学に優位するか——事実、政治は今日ではわれわれの日常生活をすみずみまで規制している。私はお台所にまですぐ響く政治がのぞましい。だが、政治で取り扱う問題と文学で取り扱う問題とは直接関係がないということを忘れないでほしい。政治と文学との差異は人間把握のしかたがちがうところから導きだされる。

最近私が読んだ河上肇の『回想記』(世界評論)や『思い出』は河上の偉大なる凡人性がでている立派なものだ。まちがいを重ねつつ、真理追求に一生をささげたことは立派だと思う。私は『思い出』を河上肇の人間的な成長を主眼として読んだ。ところが、共産党から世界評論社へ『回想記』の一部を省略するようにとの申し出があったと編集部の人から聞いた。党の立場から党内部事情を公開されるのは困るという。共産党の立場からいえば、大衆に与える政治的影響を主眼とするから『回想記』が発表されることは現在の党にとって有利か不利かを考えねばならないわけだ。だが、文学はそんな眼前の利害関係にとらわれぬ、一歩ぬきんでた立場に立つのである。文学的観点からは河上肇の遺稿の改変はあり得ない。しかし、政治は権力の争奪戦だから、自分にとって有利か不利、敵か味方かに関心をもたざるを得ない。政治は個人の運命や孤独という問題にまで関与し得ないのだ。おなじく日本人の現実生活を取り扱うにしても政治と文学とでは対象把握のしかたがちがう

のである。

しかし文学の方からいえば、『回想記』や『思い出』は遺稿であって、一字一句といえど改変できぬし、勝手にチョン切ったりできぬ性質のものだ――ここに政治と文学の差異がよくでている。では、政治と文学と異なる点はどこにあるか。たとえば中野重治が小説『五勺の酒』のなかで、天皇個人と天皇制とをハッキリ分けて書いているのは文学者として正しい問題の取扱いかただと思う。

政治的な立場からは天皇制そのものが問題となる。天皇制の役割とありかた、天皇制護持に対する闘争が政治的なテーマであるのに対して、文学者の場合は天皇裕仁個人が問題たらざるを得ないのである。

政治と文学は人間把握のしかたが根本からしてちがうのだ。政治によって社会制度の変革は可能である、だが、人間の内容は社会制度が変ることによってただちに変るとは思えない。もしそうだとしたら、社会革命を経たいまのソヴィエトでは、すでにトルストイもドストエフスキイも読まれないはずなのに、やはり依然として読まれているのである。

政治と文学の相異がそこにある。だから文学と政治とどちらが優位性をもつかというのは、そもそも問題の提出のしかたがナンセンスだと思う。かつてのプロレタリア文学運動の場合の政治の優位性とはちがうのだ。

プロレタリア文学の場合は一種の理想主義としての政治の優位性が主張されたわけで、それは殉教者的なヘロイックな文学上の問題であって、現実的な政治権力をめぐっての政治の優位性は当時の検察制度によって抑圧されていたから、問題となり得なかったのだ。プロレタリア文学者は実現不可能な理想につかれて行動したにもひとしく、それは人間情熱の一形式にほかならなかった。つまり、それは現実の政治とは別問題だったのだ。

政治が文学の取り扱う問題を解決してくれることは絶対にないと思う。要するに根本的な問題は政治と文学の人間把握のしかたがちがう点にあり、しかもその相異は政治と文学の優劣の問題ではないということを忘れてはなるまい。

〈原題・政治は文学に優位するか〉

昭和二十二年四月

敗戦後の文学において、いちばん期待されたのが新日本文学会の提唱にかかる民主主義文学運動にほかならなかったことは、おそらく衆目の一致するところだろう。そし

て、その陣営で現在もっともめざましい活躍を示している人が、中野重治でもない、徳永直でもない、宮本百合子その人である事実もまた明らかである。『播州平野』『風知草』『二つの庭』は一般読者のひろい関心をあつめつつある。

しかし、ここにひとつの疑問がうかぶ。現在宮本さんの採用している創作方法は結局むかしながらの私小説の手法じゃないか、『風知草』は所詮私小説の一種じゃないかという問題が、たとえば上林暁などから素朴に提出された。私はここで戦争前小林秀雄によって熱心に唱えられた「社会化された私」という主張を思い起す。宮本百合子の作品がどんなに私小説的風貌を帯びていようと、決してそれはむかしながらの私小説ではない。宮本百合子と上林暁とを判然区別するものはやはり「私」の社会性の有無ということになろう。かつて観念的に主張された「社会化された私」という文学的主張が現実に問題になり得る地盤は、やっと今日形成されかけているのだ。自我の社会化とは何か、という重大な問題がいまようやく問題となり得る地点にさしかかったのだ。この視点を中軸に、人間革命と社会革命との落差という問題を考えぬくことこそ、現代文学の重要な一課題だろう。

私小説ではダメだから、その反対の社会小説を、という主張には私は与し得ない。そして、こういう場合にいつも安易にバルザックやディケンズが引き合いに出されがちだが、それにも私はにわかに賛成しがたい。私ならドストエフスキイをいまこそ勉強しなおしたいと思っている。

〈原題・自我の社会化〉

昭和二十二年五月

「予見するために知り、行動するために予見する」とはオーギュスト・コントの有名な言葉だが、いま問われている危機意識とは、まず何よりも危機の予見にほかなるまい。すでに過ぎさった危機、したがってなんらかのかたちで克服された危機は問題でない。

昨今世上に流布された三月危機といい、あるいは五月危機と称されるものは、すべて危機の予見である。もっとも三月危機説が四月になって雑誌に発表され、その危機説の科学性と実証性が問われねばならぬのも、最近の出版事情においてはあり得ることで、これはまさに危機説の危機でもあろうか。

予見にはつねにそれに対する適応と対策とがともなう。

ここに国の政治の発動がある。今日、経済の破局的な進行に直面して、現実の政治力がいかなる地点に結集されるかは、民主選挙の完了した現在、もっとも微妙深刻にあらそわれている。

選挙前にほぼ予想された保守勢力の左、進歩勢力の右という結節点は、選挙による「民意」にしかと裏づけられて、目下何センチあるいは何ミリ左右に寄るかの測定にまで、そのオリエンティールンクは精密化しているかにみえる。

その位置づけのいかんによって、危機の打開はいかなる社会層の負担において、いかなる社会層の救済としておこなわれるかが決定されるだろう。一時を糊塗してあらたなる危機を将来にもちこし、危機をいたずらに累積したところに、今日の経済危機の破局的な実体があるとすれば、選挙にあらわれた「民意」にこたえるのには、いたずらな遷延策であってはならない。

しかし、予見はあくまで予見にすぎぬ。重要なことは、予見が現実によって試される過程そのものだろう。こと自然現象に関してさえ、地震などの天変地異も十全には予知されがたく、明日の天気予報すら百発百中とはいいがたい。無論、私は科学の進歩を疑ったり否定しようとするものではない。ただ遅々たる（あるいは旧態依然たる）政治の動きに対する焦燥と不満から、現実をありのままの現実として直視する困難を回避し、予見と現実とをとりちがえるような態度を警戒し、忠告したいばかりである。

以上、私は政治・経済の世界を、予見とか予知という人間知性にかかわらせて考えてみた。しかし、ここに全く別個の事態も発生しつつあることをみのがすわけにはゆかない。

今日、ある種の文学精神が手さぐりのまま模索している虚無と頽廃の文学的人間像、あるいは終末観に対決してメシアを待望する人間存在のやみがたい宗教性に根ざして、簡明な処方箋を用意する政治・経済中心の社会意識と対立しつつ、精神の自律性こそ政治的・経済的隷従と荒廃とからの、人間主体の解放を用意する基本条件とする自覚が生れつつある。この事態は重大だ。

政治・経済のような人間存在の手段の地位を占めるものが、かえって逆に人間を支配する事態からの人間解放の道こそが、解放の基盤としていまこそ明瞭に自覚されねばならぬのではないか。

手段からの目的の解放、政治・経済の人間支配よりの自由、ここにこそ必然より自由の王国へのスローガンの人性論的根拠があり、冒頭にかかげたコントの言葉の自然から

社会の領域にわたる人間存在の行動綱領としての意義があるのだ。

〈原題・危機意識と政治〉

昭和二十二年五月

レーニンは一九〇一年に「何故に社会民主党は社会革命党員に対し断乎たる無慈悲の闘争を宣言せねばならぬか?」という覚え書を書いた。いま中野重治はレーニンのひそみにならって、荒正人と私とに対して再び「断乎たる無慈悲の闘争」を宣言した。つまり、一九〇五年以前のロシア社会民主党が社会革命党に対してたたかった戦術を、中野は一九四七年の日本における文藝批評の領域に、そのまま踏襲したわけである。さしずめ中野はレーニンで、荒・平野はゴーツ・チェルノフというところでもあろうか。といえば、中野の「断乎たる無慈悲の闘争」ぶりがひとつの「トバエ」にすぎないことは誰の眼にもあきらかなはずだ。

しかし、それを単にトバエとして笑いすててていいだろうか。どうも中野は本気で「日本革命、この民主主義革命の導きの力を、労働者階級から小ブルジョアジーに移そうとする政治的流れの文学的代弁」として、荒・平野に「断乎たる無慈悲の闘争」を開始するつもりらしい。ほかならぬ新日本文学会の最高指導部のひとり、日本共産党文化部の有力なメムバーのひとり、十万の支持者をもつ新参議院議員のひとりとして、いまこそ荒・平野をたたきつぶそうと「全力をあげて書いている」としか思えぬこの事実は、私を心からびっくりさせる。そんなにおれたちはエラクなったのかという私どもの政治的・文学的地位の向上(?)と、中野を代弁とする日本共産党文化部の政治的・文化的地位の墜落とを、自己ならびにその所属団体に対する「過小評価」として、あるいは大人げないトバエとして笑いすてるには、すこしばかり重大すぎる事実ではないか。

むかし中野重治は「論争の態度について、というような言葉を使うことは、問題の解決に無関係な、問題の解決をゴテつかすだけの道草であって、問題が解決された時にはそっくりそのままそういう事を言ったものの眉間にそれが投げ込まれる事を知らねばならぬ」と書いた。ほんとうのところ中野重治と私らの間に「論争」がとりかわされた、とは私は思っていない。中野もちょっと書いていたように、すくなくとも私はまだ問題を問題としてはっきり「学問的」に提起していない。ただ中野の「プロレタリア文学史観」については一応問題の糸口だけ提出しておいたが、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com